

草庵仏教

第161号
(発行日)
2003年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyout3@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

真宗における他力

L 「よくお説教で他力という言葉
葉を聞きます。他力とは一体何
かについてお尋ねしたいと思っ
ます」

D 「他力という言葉はもともと
仏教語ではなくて、世間で日常
的に使われていた言葉だったの
ですが、それが浄土教の教義で
使われるようになりました。中
国の曇鸞大師あたりから使われ
出したのですね」

L 「曇鸞大師はいつ頃の人です
か」

D 「476年に中国の山西省に
生まれ542年ごろに亡くなら
れたと伝えられています。浄土
の教えをことに論理的に述べら
れた七高僧の一人です」

L 「真宗のお説教では、私たち
が他力によって生かされている
というお話をよくされますね」

*

D 「他力によって生かされてい
るといってお話を貴方はどのよう
に聞かれたのですか」

L 「私が生きているのは私の力
だけで生きているのではない。
私以外のものによって生かされ
ている。たとえば水とか空気と
か太陽の光などの大自然の恵み。
あるいは産んで育ててくれた両
親のおかげ。また学校の先生か

ら沢山の知識を教えて頂いた。

また作物を作ってくれた人たち、
衣類を作ってくれた人たち、そ
れを運ぶ人たち、さまざまな人
たちの働きのおかげで私たちは
生きてこれた、いや生かされて

きた。他の物や人のおかげを他
力といい、そういう他力によっ
て私は生きることが出来たのだ
から、まさに他力によって生か
されてきたと、そういうように
お聞きしました」

D 「そうですか。そういう意味
で言えば他の物や人だけでなく
て、自分の身体でも、心臓が休
まずに動いている、あるいは血
液が体中にいきわたる、胃がも
のを消化してくれることや手足
が器用に動くことなども、これ
は私の力ではないから他力であ
るとも言えますよ」

L 「自然の働きや周りの人々の
おかげ、いわば他力によって私
は生かされているといわれるお
話はよく分かります」

D 「そうした他の力によって生
かされているのは事実ですから、
それを有り難く思うことは結構
だと思います。仏教的な表現で
言えばさまざまな縁、さまざま
な因縁のおかげということだ
しょう」

*

L 「こういう他のさまざまな働

きによって生かされていること
に目覚めるのが真宗の他力の救
いなのでしょうか」

D 「貴方の言われるような、い
わば因縁に目覚めるというのは、
それは仏教的な自覚であり、仏
教の救いといえますよ。が、そ
ういう他力観は浄土真宗の教義
で言われる他力ではありません」

L 「そういういろいろな縁で生
かされていると目覚めるのは一
般仏教のいわば仏教的な目覚め
であつても、真宗という他力で
はないのですね」

D 「ええそうです。仏教共通の
縁を他力の働きというように表
現されることが時々あります。
ただし、それが通俗的でない
しは世間的に理解されずと、
たとえば今日もお陰様で無事に
生かされて有難うございますと
いうような場合、しばしば自分
の都合の良い状態を有り難く思
っているという事がよくありま
す。その場合は仏教という自覚
とか救いではありません」

*

L 「なぜですか」

D 「こうした有り難さというの
は、自分の都合の良い状態を喜
んでいるということが多いので
す。(生きていることは幸いで死
ぬことは不幸) (経済的にも健康
的にもスムーズにいつているこ
とは結構なことです。生計が不安に
なり病気になるのは不幸)とい
うことの底には、まず自分の生

存の確保というか、生存に対す

る執着がベースにあつて、その
上で(私はこうして無事息災に
生かされていることは有り難い。

これも周りのおかげ、他力のお
かげ、佛さまのおかげ)という、
そういう喜び方ですね。そうい
うものの方には我執・我愛の
心が根にあります」

L 「こうした(私は他力によつ
て生かされていることを喜んで
います)という考え方の中にも、
自分の存在への深い執着、いわ
ば生を愛し死を憎むという我執
・我愛の心があるとされるので
すね」

D 「ええそうなんです。ですが
ら、我執・我愛があることに気
がついていないと、生計が乏し
くなつた時や、あるいは重い病
気になつた時など、いわば自分
が都合の悪い状況になつた時
は、(他力のおかげさま)という
喜びは吹っ飛んでしまいます。
それこそ神も仏もあるものか、
というようになりかねません」

*

L 「それでは(おかげさま)と
喜ぶのは問題があるのでしょ
うか」

D 「自分の都合の良くなつたの
を(おかげさま)と喜ぶのは我
愛の心が喜んでいるともいえま
す。しかしさまざまな恩恵を純
粋に喜ぶ場合もあります。
たとえば妙好人の源左同行さん
の話に

源左は時々自分の掌を尊んで、

「親からもろうた手は、つよいもんだのう、いつかなさいかけ（手入れ）せえでもええけのう」と喜ばれた」

また

《源左さんは、田仕事⁺が済むと手を洗って押し頂かれました》という話が伝えられています。

このように自分の手をも恵みと喜ぶというのは純粹にいわば他力的な働きを喜んでいと言えます。それは、源左さんの場合は真宗の信心によって物の見方が転換して、いろいろなものの上に有り難さ、尊さを感じるといふ、純粹な信心の智慧によるもの^{うかが}の見方からきていると伺えます」

*

L 「ではさつき、世間的通俗的ではない、さまざまな因縁としての他力に仏教的に目覚める場合があるとのことですが、それはどういう意味ですか」

D 「（他力的な因縁に生かされている）という場合、時には深い自覚が起こることがあります。さきほどの通俗的な他力は、私（自我）が先ずあってその私を支えてくれる縁を喜ぶというのでしたが、仏教的自覚として因縁に目覚めるといふ場合があります」

L 「それはどういふのでしょか」

D 「私そのものが我以外の働きによって成立しているというよきな自覚です。自我を超えた大

いなる働きといふか、そういう働きによって初めて自分が存在しているといふような実存的な自覚。仏教的に言えば、（自己は自己以外のものによって初めて自己である）という縁起的自己に目覚めるといふ場合は仏教的自覚でありましよう」

L 「難しくよく分かりません」

D 「もう少し分かりやすく言うと、私という思いに先立って（いまここに事実存在している）という存在の事実⁺に目覚める。私の一切の思い（自我）に先立つ存在の事実⁺に気がつくといふのは仏教的自覚です。その存在の事実を（他力の事実）といわれたいります」

L 「大変難しいですね。」

D 「本当は実に単純な事実そのものなのですが、しかしながらこうした（存在事実の他力性）を自覚するのは容易ではありません。このような自覚に達するには思想的な訓練とか、あるいは極限的な状況に落ちたのが縁となる場合が多いようです」

*

L 「こういう存在の事実への目覚めが真宗の他力の信心ですか」

D 「いいえ。親鸞聖人が教えてくださる真宗の他力ではありません。ただしそれは仏教的な尊い自覚であることは間違いないと思います」

*

D 「先ほどもちよつと申しましたが、真宗でいう他力とは阿弥陀仏の本願他力のことです」

L 「阿弥陀仏の本願力とは」

D 「阿弥陀仏の本願とは、阿弥陀仏が、あるべからざる苦悩の私たちをあるべき安らかな状況（浄土）へ至らしめようとして、苦悩の衆生を救おうと働きかけてくださる佛の大悲の働きです。これを本願力といい、これが真宗の他力観です」

L 「そうすると、水とか空気とか体の機能とかいうものには別に救済意志はないですから、単に私以外の他の物の用としての他力であつて本願他力ではないのですね」

D 「そうなんです。阿弥陀仏は法蔵菩薩として一切衆生を浄土の世界へ至らしめようと願ひ、その願ひを実現するために五劫の間思惟を重ねて、万人救済の道を建て、この願ひを実現するために永劫の間菩薩の修行をされ、その法蔵菩薩の願ひ成就して弥陀の本願力として無窮にはたらいてくださっていることを大無量寿経に積尊はお説きになつています」

L 「本願力の力といふのは阿弥陀仏の救済能力のことですね」

D 「そうです」

L 「どのようにして私たちは救済されるのでしょうか」

D 「阿弥陀仏は私たちにであい、私たちを摂め取り、私たちを浄土へと導き、浄土に生まれさせ

てくださるのです」

L 「どのようにして阿弥陀様は私にであつてくださるのでしょうか」

D 「まず南無阿弥陀仏という阿弥陀仏の名に誓いを込めて私たちに与えてくださるのです。（汝我が名を称えよ、我は汝を引き受けて浄土へ必ず生まれさせる）という念仏往生の誓ひの名である南無阿弥陀仏の名号を与えて称えさせてくださるのです。それによって阿弥陀仏は私たちにであおうとされているのです」

*

L 「なぜ（我が名を称えるばかりで浄土へ生まれさせる）と誓われたのですか」

D 「それは阿弥陀仏は私たち凡夫の姿を徹見して、罪悪深重にして煩惱深く、いかにしても助かる縁も手がかりもなき者、迷いを離れて悟りに至る徳も能力もない破綻^{はたん}した者とみたまひ、憐れみたまうからです」

L 「仏様はそのように私をごらんになつておられるのですね」

D 「ええ、阿弥陀仏は罪悪深重にして迷いを重ねるしかない私たちを深く深く憐れみたまひ、この者を、佛の大智大悲の力のみにて生まれさせようと思ひ召して、仕上げられたのがお念仏なのです」

L 「今称えているお念仏は、（汝を必ず助ける、我が名を称えよ）という誓ひがかかっている御名なのですね」

D 「そうなんです。正信偈には（極重悪人唯称仏）と申されています。極重悪人とは、阿弥陀仏のお助けの対象として、私たちを見たもう、私たちの姿です。南無阿弥陀仏はそんな私たちに喚びかけたもうみ言葉であり、ほかに救われる道なき私に（必ず助ける、我が名を称えよ）と仰せ下さるのです。（我が名を称えよ）の仰せには人間の苦悩に深く共感し共苦^{きよく}して大悲したもう限りない情けが込められています」

L 「お念仏のいわれにはそういう阿弥陀様の極まりのない慈悲の思召^{おぼ}があるのですね」

D 「そうなんです。このお念仏を頂いて称え、如来様の大悲に驚く時、阿弥陀の慈悲は私の中に流れ込んでくださいます。そして阿弥陀の大悲の心と私の心が離れなくなりまます。これが佛とのであいです」

L 「このような大慈大悲の弥陀の本願の働きのことを真宗で他力といふのですね」

D 「ええそうです」

（了）



岐阜提灯 1
(C)SHOGAKUKAN
INC.

甑島を訪ねて

周年法要のご縁で、昭和六十年に甑島を

離れて以来十八年ぶりに島を訪れた。十月二十五日大阪空港を朝八時に発ち、鹿

児島空港に着き、串木野新港まで直行バスに乗り、高速船に乗船。午後三時前、

下甑島手打港に到着。下船すると大照寺の坊守様が車で迎えに来てくださり、島の西海岸を走る。風景は昔も今も変わらない。やがて以前に在勤していた瀬々の浦地区の西浄寺に三時過ぎに着いた。西

浄寺はお内陣の仏具などが新調され、庫裡の水回りがリフォームされている外は以前と殆ど変わらないように思えた。すでに勤行は終わり、御法話が始まっていたので早速聴聞。講師は著名な高史明先生。

「人間はいのちを（我がもの）とし、子供も財産も我がものと見る自力の知恵に生きていて、そこからさまざまな問題を起こしている。人間のいのちの尊さが見えなくなり感じられなくなっている。それに対して佛の智慧こそ人間のまことのいのちを感じさせるものであり人と世界を救うものである。だから佛の智慧を念佛に頂かなければならない。また人間の知恵は物を見るのに、たとえば（コップ）といえはコップという言葉の概念だけでは、もののいのちそのものを見ていない」という趣旨のお話を聞かせて頂いた。

先生のお話はよく分かる部分と難しくて取っつきにくい部分とが同時に並行さ

聞法になれていない人も感銘するところを見出すと共に随分聞法歴の長い人にも新しい物の見方を学ぶことが出来ると思われた。

*

高先生のご講話後、夕六時半から高先生ご夫妻を囲んでの懇親会が予定されていたので、それまでの間、浦島旅館に荷物を置いて地区内を少し散策した。快晴で海も空も限りなく蒼く、ナポレオン岩は荘厳なまでに美しい。私が居た当時総代であった故山下輝光さんの家にお寄りした。奥さんのサミオさんがおられ来訪を大変喜んでくださった。帰りに故中村勉（当時総代）のお家の近くで勉さんの娘さんに遇ったのでおうかがいし、お内仏にお参りさせて頂いた。勉さん生前中は鹿の子百合の球根を何度も西宮の我が家へ送ってくださり、毎年百合の花を楽しませて頂いた。

その後、西浄寺の修復に尽力された宮野隆英さんのお店に行く。ご夫婦ともお元気だった。いろんな話に花が咲いた。店は昔以上にいろんな雑貨で一杯だった。誰か店に来て話が出来るように、イスと茶飲みの机が用意されている。こういう心配りは何とも嬉しいものである。

さて夕六時半からの懇親会に出席。高先生を囲んでの会食となり、新鮮な刺身が並べられた。石鯛がことに美味だった。懇親会には出仕された僧侶は十数名。その中に鹿児島別院輪番と前輪番、甑島の各寺の住職代務や別院職員の方々がおられた。僧侶で知っていた人は北向さん。奥平さん、中江さんなど3・4名だけで

あった。宴たけなわとなり、内川内のご婦人方（和子、チミエさんなど）が三味線でおどりを披露された。その後、西山のご婦人たちが半夜節を踊り、やがてタオルが僧侶にも回されて、回された人が踊らねばならないという独特の風習があつて、私にもタオルが回ってきた。（このタオル）はいささか苦手でなにがしかのパフォーマンスをしてやつとその場をしのいだことであつた。

明朝（二十六日）は九時からお内陣修復法要に出仕。法要後、高先生のお話が引き続きあつた。

「人間は文字の知恵だけで生きようとしている。佛の智慧を頂かねば生も死も本当のところは分からない。亡くなった方はお念仏とともに、生きている私たちの所へ海の音のように来られている」とのお話をされた。

法要が終わり、西浄寺の三角師と中村説さんが丁寧な謝辞を述べられた。これほど大きな法要は甑島の大谷派寺院では初めてではなかったろうか。三角先生と寺の役員さんのご苦労は大変なものだったと思われる。

正午になって高先生ご夫妻と僧侶方はすべて西浄寺からお帰りになり、長浜方面に向かわれた。一人残った私は寺の前の宮野勝男さん（かつて総代をしておられた）に会い、午後は旅館で午睡してから地区内をまた散策。瀬々の浦は、学校が新築されたことやあちこちに道路が出来たことと、漁協・農協が無くなったことなどのほか、昔の風景とさしたる変化はなく独特の情感と情景は昔のままである。

十月二十七日の早朝、親切にしてくださいました浦島旅館の隼子さんに礼を述べ、

西浄寺の三角師と奥様の運転で内川内に向かう。瀬々の浦では懐かしい多くの方々にお会いすることができた。もうこの世で再会することは難しいと思いつつ瀬々の浦を離れた。

内川内のお寺には十二・三人ほどの方々がすでに集まっておられた。当時番役としてお世話下さった故宮野基さんの奥さんもおられた。少しお話しして歓談後、お世話になった故宮野エミ、故中村勝泰さんのお墓に参る。中村茂良さんが内川内を案内してくださり、エミさんの家にも寄り、故新三郎さんの家も訪ねた。新三郎さんのお子さんの悲しかったお葬式をしたことが忘れられなかったからである。内川内は人口が非常に減っているのはやむを得ないとしても、将来どうなるのであろうかという想いが頭を横切る。

三角先生夫妻に長浜の満月旅館まで車で送っていただき、三角先生のおかげでこのご縁に会わせて頂いたことのお礼を述べてお別れをした。その後、敬老園併設の特老を訪問。ロビーで東祥子さんが待っていてくださった。中で東サチエさんと娘さんの岩元美香さん、町ミコエさんが待っておられた。サチエさんのご主人東重行さんは長光寺に私が居た当時寺の責任役員をされていた方で、随分私の力となって下さった。サチエさんは思っていた以上に元気で安心した。二階に上がると、ちようどデイサービスの日、知った方々が何人もいて、再会を喜びあった。

特老を出て、東弘之さんの家でごちそうになる。昨夕ご自身がつつてこられた新鮮なイカをごちそうになる。やはり新鮮なものはひと味もふた味も違う。食後、いささか疲れたので旅館で午睡してから

あつた。宴たけなわとなり、内川内のご婦人方（和子、チミエさんなど）が三味線でおどりを披露された。その後、西山のご婦人たちが半夜節を踊り、やがてタオルが僧侶にも回されて、回された人が踊らねばならないという独特の風習があつて、私にもタオルが回ってきた。（この

明朝（二十六日）は九時からお内陣修復法要に出仕。法要後、高先生のお話が引き続きあつた。

「人間は文字の知恵だけで生きようとしている。佛の智慧を頂かねば生も死も本当のところは分からない。亡くなった方はお念仏とともに、生きている私たちの所へ海の音のように来られている」とのお話をされた。

法要が終わり、西浄寺の三角師と中村説さんが丁寧な謝辞を述べられた。これほど大きな法要は甑島の大谷派寺院では初めてではなかったろうか。三角先生と寺の役員さんのご苦労は大変なものだったと思われる。

あつた。宴たけなわとなり、内川内のご婦人方（和子、チミエさんなど）が三味線でおどりを披露された。その後、西山のご婦人たちが半夜節を踊り、やがてタオルが僧侶にも回されて、回された人が踊らねばならないという独特の風習があつて、私にもタオルが回ってきた。（このタオル）はいささか苦手でなにがしかのパフォーマンスをしてやつとその場をしのいだことであつた。

西浄寺の三角師と奥様の運転で内川内に向かう。瀬々の浦では懐かしい多くの方々にお会いすることができた。もうこの世で再会することは難しいと思いつつ瀬々の浦を離れた。

長光寺に行く。池のそばにあった趣きのある柳はなくなっていたが、ほぼ以前のままである。長光寺のご本尊阿弥陀如来様は本当に活きたみ仏と感ずるほどの有り難いお仏像である。私は実生きた仏様と信じている。なぜならこのお寺で佛とのであいを経験したからである。

午後三時から長光寺で聖人の御速夜法要と責任役員の中川敬隆さんの発案による門徒会員の研修会を兼ねるということで法話をさせて頂いた。手打と鹿島の門徒会員の方々が来られていた。中に手打から日笠山さんがおられて、私がいたのでびっくりされた。というのは以前、氏が尼崎におられた時に私がお家に何度かお参りしたからである。「先生に会えるなら家内を連れてきたのに」と大変残念がられた。

さて法話の内容は「佛に会うことが一番大事なこと。しかし自分が勝手に思いこんだ仏さんを選んで佛にあいそこないをしてしまうのが凡夫。そんな私たちに佛の方から会いに来られたのが南無阿弥陀仏の名号。南無阿弥陀仏を（帰命尽十方無碍光如来）と聖人はお敬いになった。尽十方とは、阿弥陀様が共にいてくださらないような人は一人もいないということ。佛と人は不可分ということ。無碍とは私の罪業や愚かさや人間性などの一切の障りを阿弥陀様は邪魔にせず、私のすべてを受容し、浄土へと導き入れて佛にしようとの大悲のお心。光如来とはいるもなくかたちもなまことのはたらきである阿弥陀仏が言葉となり、南無阿弥陀仏の名号となって私に現われ喚びかけてくださること。人間は言葉によって相手の心を知る存在だから、阿弥陀仏も南無阿弥陀仏の言葉と

なつて私にご自身のお心をお知らせくださるのである。そして帰命とは、よりかかれ、よりのめという阿弥陀様の仰せ。だから南無阿弥陀仏とは、タノメと仰せくださる阿弥陀様ということ、（私は汝と共にいて、汝のありのままを引き受け浄土に生まれさせるから我をタノメ）と喚びかけて下さる阿弥陀様という意味である。そうして仏様のおっしゃることを聞いても、（そうは思えない）と、私の方の考えや思いを優先させるといつまでたってもいただけない。私の考えはさしおいて、仏様の言われることを素直に信受することが大事であり、それが信心である」

とのお話をさせて頂いた。終わってから、中川敬隆さんのお世話で懇親会を開いていただいた。西宮におられた中村正英さんも参席。解散後、旅館に戻ると尼崎でお世話になった中川徹志さんがご夫婦で訪ねてくださった。島の現状などをいろいろお聞きした。下甕での深層水の生産は将来性があるというお話が興味深かった。

*

長浜は私がいた時は中川渥美さん、中川光義さんなどの熱心な念仏者がいた。お朝事にも十人ほどは毎朝参詣があったが、渥美さん、光義さん亡き後、お念仏の種はだんだん先細りになっていく感があるとのこと。そんな中、東祥子さん、町田スイ子さん、宮ヨネさん、磯俣京子さんなどが仏法に心を寄せてくださっている。なんとか長光寺の阿弥陀様を中心に仏法の種が絶えることなく相續してくれることを切に願うばかりである。長浜の方すべてが念仏者になることはもちろん不可能であるが、一人でも三人でいい、

お念佛を本当に喜ぶ人が出てくださることを心から祈るばかりである。お念佛を喜ぶ人は、闇夜の空の星のように私には思われる。そういう人が一人いれば、その地域の人は人生にいきづまった時はその人に道を聞けばいいのである。闇夜の道中は先頭に提灯を掲げて歩いてくれる人が一人いれば、みんなが提灯を持たなくても先頭の提灯持っている人についていけば助かるのである。そういう「二人」が途絶えないことが大変重要に思う。

十月二十八日。長光寺の中島師のご好意でお朝事の法話をさせて頂いた。

「真宗の仏法は世界の宝だから仏教徒であることにもっと自信をもってほしい。また弥陀の本願は不思議なもので、誓願を不思議と信じる外はないこと。不思議といえば周りのすべてが不思議に包まれている。だからお念仏で助かり浄土に生まれさせていただくことが不思議であってもなにも奇抜なことではない。浄土に生まれていく道がこの世を生ききっていきける道になってくださる」というをお話しをした。朝食後、長浜地区内を少し散策。長浜は港の周辺が変わり、立派な特老と診療所が出来ていたのが目立った。島の外の地区よりはやはり活気があるようだ。

朝十時十五分のシーホークで離島する

ため長浜の港で待っている間、ご縁の方々が見送ってくださいました。

念佛寺責任役員である山下清人さんの兄弟の中川信志さんや下野入江さんも見送

りに来てくださった。皆さんと港で写真を撮ってから、船に乗り、懐かしい甌島を後にした。

串木野港での下船の際に、同じ船に乗っていた瀬々の浦出身の中野清子さんが、私の家は空港の近くだから家には是非寄ってほしいとのこと。親戚の方が車で迎えに来ておられ、同乗させて頂いて皆で中野さん宅にお寄りし昼食をいただいた。中野さんは長一さんという長年西浄寺に奉仕された方の娘さんで初めてお会いしたことである。

仏法の因縁は不思議である。仏法を大事にする家はその子孫にまでも目に見えぬ仏法の種を残し続けていくものである。金銭の遺産は子や孫が散財したらたちまち消えてしまいが、お念仏の種は不思議にも代々続いていくものである。遺産の相續より仏法の相續こそ永続性がありかつ価値が高い。

夕方になって鹿児島空港までまた送って頂いた。夜九時半頃、西宮の念佛寺に帰着。駆け足の甌島再訪であったが、多くの方々に会い、楽しく有意義な旅をすることが出来た。

(了)

【念佛寺報恩講】

十二月二十二日（月）

午後二時始まり

講師 新田修己 師

ご講師 新田修己 師